

例年になく暖冬がやがて終わりを告げ、いよいよ陽春の訪れかと感じ始めた矢先に、連日のように報告されております内容での新型コロナウイルス感染拡大により、3月からの一斉休校措置に伴い、規模及び内容を縮小しての開催とはなりませんが、本日この場において、第六十回の卒業証書授与式を挙行できますことを、まずは喜び合いたいと感じております。伝統ある揖斐川中学校を巣立ち行く百二十七名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

このような大変な状況の中にあっても、本日は、揖斐川町教育長：野原靖（のはら・やすし）様、揖斐川町教育委員：横山法子（よこやま・のりこ）様、本校PTA会長：大郷元宏（おおごう・もとひろ）様のご臨席を賜りました。誠にありがとうございます。高い所からではございますが、厚く御礼申し上げます。

卒業生の皆さんは、これで中学校までの九年間の義務教育すべての課程を修了されたこととなります。これまで、辛く苦しい時もあったことと思いますが、そのひとつひとつを懸命に踏ん張りながら乗り越え、それぞれに立派にたくましく成長してきました。

私は、卒業生の皆さんと共に過ごしたのは、わずか一年間ではありましたが、その中でも、皆さんを中心とする揖斐川中学校の素晴らしさをいくつも感じさせてもらうことができました。

まずは、規律に満ちた皆さんの生活ぶりに感心しました。いつ校内を廻っても綺麗に整えられた教室環境、そして、凛とした姿勢で学習活動に臨む姿、さらには、毎日の給食パントリーでの後片付け作業に責任をもって前向きに取り組む姿や、毎日の掃除活動に無言でひた向きに取り組む姿、これらは、これまでの揖斐川中の先達が築き上げてきた流れである伝統を、立派に引き継ごうと努めている姿として私には映りました。

そして、そんな平常のこだわりから生み出される規律に満ちた姿と、勝利を目指すエネルギーとが相まって創り上げられた活力に満ちた体育大会は、観る者に大きな感動を与え得るものでした。

さらに、毎日の授業の中には、規律と共に、皆さんの温かさを感じることもできました。仲間と一緒に高まり合いたいという願いが伝わってくる小集団での学習は、まさに今の学校で求められている、主体的な学び合いの姿に通ずるものでした。また、その延長には、みんなで決めたやり切り活動の達成のために、毎朝、玄関に立ち、仲間全員の到着を待ちながら見届け励まそうとする姿や、先日の伝統を引き継ぐ会での個人の語りの内容がなかなか見つけられずに苦勞している仲間に対して「大丈夫だよ、あなたの頑張っているあの委員会活動のことを書けば良いんだよ」と温かい言葉を自然にかけられる、思いやりの心によって築かれた温かい仲間関係の育ちがありました。ちなみに、あの語る会の中で、卒業生の皆さん一人一人が後輩たちのために語ってくれた内容は、在校生たちの今後にとっての金言となってきているものと、私は期待をしております。

そしてさらには、昼休みの過ごし方の改善を始めとして各種のキャンペーン活動等、生徒会執行部や各委員会を軸に、自分たちの生活の中にある課題を浮き彫りにし、そこにメスを入れるために自分たちの考えと力で動いた足跡がいくつも刻まれました。本校への赴任以来、何でも誠実に行動しようとする皆さんに対して、私が最も求めたいと感じていた、「自ら考え、行動しようとする主体性」が、揖斐川中の中により強く感じられ始めた場面として、とても嬉しく思いました。

以上のように皆さんの歩みを振り返ってみると、そこには物事に真摯に取り組む「ひたむきな姿」と、仲間を真に大切にしようとする「思いやりの心」に満ちた生活ぶりの中で、自分たちの力で高みを目指していこうとする「自治の精神」に磨きをかけてきたという、揖斐川中の伝統の三本柱の実現に迫る皆さんの素晴らしさが見えてきます。卒業生の皆さんが先頭に立ってこのような充実した一年間を創り上げてきてくれたことに対して、私は心から感謝すると共に、今後も在校生たちが立派にその伝統を受け継ぎ、揖斐川中学校の歴史に、さらに磨きをかけてくれるものと信じております。

さて、本日をもって揖斐川中学校を巣立っていく卒業生の皆さん、明日からは、それぞれが自ら選び取った道を、自らの力でしっかりと切り拓きながら力強く前進していかねばなりません。皆さんには、今年の五月に改元された令和という新しい時代の担い手となり、国づくりの主役とならなければならないという、大きな使命が間違いなく課せられることとなります。そんな新しい時代の主役となるべく皆さんに、私から最後に次の言葉を贈りたいと考えました。

皆さんもよく耳にしたことがある西郷隆盛さんや、小泉元総理大臣らも大きな影響を受けたと言われている、岐阜県にゆかりのある佐藤一斎という方が、江戸時代に記した言志四録という書物の中にある

『一燈を提（さ）げて暗夜を行く
暗夜を憂（うれ）うること勿（なか）れ
只（た）だ一燈を頼（たの）め』

という言葉、ときに思い出してください。

「一燈」とは提灯の灯りのことで、人の「夢や志」を意味します。この言葉には、『自分自身の生き方を信じて進む人は、どんな時代や環境においても迷うことなく、自らの志や目指すところに向かって、自信をもって進むことができます。』という教えが込められています。まさに私たちは、先が見えない大きな不安の中に身を置いている今ではありますが、そんな中でも、自分の選んだ道信じ、常に目標を掲げ、その実現に向けて力強く生きていくことの大切さを忘れないでくださいという願いを込めて、皆さんの卒業に際しての餞（はなむけ）の言葉として選ばせてもらいました。

やがて、私たち人間に代わって、すべての仕事を人工知能・AIが行う時代がやって来て、人がAIに使われるようなことになるかもしれないとも言われていますが、私は、決して人工知能には負けない、AIには真似することができない、しなやかさと強さを併せ持った心に支えられた力を発揮することができる、それが人の強みだと信じています。先ほどの言葉には、その心の強さを追い求めてほしいという願いが込められていることを、ぜひ覚えておいてください。

結びになりましたが、保護者の皆様、義務教育九ヶ年を無事に修了されましたお子様のご卒業、心よりお祝い申し上げます。今日までの十五年間、我が子を慈しみ、手塩にかけて育ててこられた保護者の皆様におかれましては、感慨もひとしおのことと存じます。どの子も心身共に立派に成長され、それぞれの選んだ道に向かって逞しく歩み出そうとしています。この三年間におきましては、私たちには至らぬことも多々あったことと思いますが、本校の諸活動にご協力いただき、お支えいただきまして誠にありがとうございました。また、本日は、このような形で、お子様の晴れの門出の日を十分に祝うことができないような形となってしまいましたことに、お詫びの意を表しながら、深いご理解をいただきましたことに対しまして、重ねて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

加えて、地域の皆様方にも、卒業生への支援のみならず、本校教育活動に対する深いご理解と、慈愛に満ちたご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げます。今後も、これまで同様に、力強いご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後に、卒業生の皆さん、私たちの住む揖斐川町は、国歌にも歌われる「さざれ石」を生み、皇室三代との深いゆかりをもつ「すめらぎの森」をはじめとする豊かな森に恵まれ、東海圏域を清流揖斐川の水で支えている大切な町です。そんな中で生きる揖斐川町民としての誇りを胸に、「常に最善を尽くすべく、自らを見つめ、磨き続けようとする生き方」を大切にしながら、令和の新しい世の担い手となり得る自分づくりを目指し、たった一つしかない自分の命を精一杯に輝かせ続けていってください。

今後の皆様のご健康とご活躍に満ちた洋々たる前途を心より祈念して、私の式辞といたします。

卒業生の皆さん、本当にありがとう。そして、さようなら。

令和二年三月六日
揖斐川町立揖斐川中学校長
折戸克明